【原著】

総合試験の実態調査

林 篤裕（九州大学），伊藤 圭（大学入試センター）

「総合試験」に関する答申が出て 10 年近くが経過し，現在全国で 70 程の大学がこれに類する試験を実施している。今回我々は，その試験内容に注目し内容分析を行った。その結果，約半分は単一の測定対象領域から成る試験問題が混載された総合試験であることが判った。加えて，思考力を問う設問を含む総合試験は，学部・学科に関連する測定対象領域に基づいて出題されていることも判った。本研究は，今後総合試験の導入を検討する大学にとって一つの参考となると考える。

1 はじめに

従来，日本の大学入試では教科・科目別に知識や学習達成度を測定し，入学の合否を決定してきた。しかし，90 年代に入ると「測定する学力の多様化」や「入学試験の軽量化」が求められるようになり，小論文試験や科目横断型総合問題，総合適性試験などが導入された。また，この流れを受けて，2000 年 11 月に大学審議会から出された最終答申「大学入試の改善について」では，教科・科目ごとの達成度とは異なる受験生の特性を測定する手段として「総合試験」が提案された。この中では，高等学校のカリキュラム内容を十分に勘案しつつも，教科・科目にとらわれない数理的な思考力や言語的な表現力，また，大学で学ぶために必要であると考えられる基礎的・総合的な能力等を測定し，合否判定資料として使うことが求められている。

答申から 10 年近くが経ち，現在大学入試に導入されている総合試験を実施状況や各種関連資料から総覧すると，利用形態の観点からは，(ア)受験者の種々な能力，(イ)特定の学部向けの基礎能力や適性，(ウ)推薦入試や AO 入試における幅広い学力，(エ)基礎的な能力，を測定する試験等に分類される。また，試験内容の観点からは，(A)教科・科目複合型の総合試験，(B)教科・科目にとらわれないカリキュラムフリー型の総合試験，に分類される。このような状況から，多様な試験を指す言葉として「総合試験」が用いられていることが判る。

本稿では，現在実施されている「総合試験」について，その実態を報告すると共に，試験問題の内容の観点から分類を試み，今後総合試験を導入しようとする大学にとって参考になる資料を提供しようと考えた。

2 実施状況

平成 20 年度入試において，高校の教科科目には含まれていない名称である「総合問題」や「総合テスト」，またはそれに類する名称の試験(これらをまとめて，ここでは以後「総合試験」と呼ぶことにする)を実施している大学に，使用した問題冊子を提供してもらい，本研究に用いた。対象とした大学数や学部数，問題冊子数は表 1 の通りである。これを見ると，国公立大学は試験問題を学部単位で作成・管理していることが想像されるが，一方で私立大学は 1 冊の問題冊子を複数の学部で同時に使っている大学もあることが判る。また，国立大学の 73 学部の実施時期の内訳は，AO 試験(3 学部)，前期試験(30 学部)，後期試験(40 学部)であった。後期試験で実施している学部の方がやや多いものの，前期試験と後期試験がほぼ拮抗している傾向は伊藤(2006a)の調査結果とも符合する。

なお，一つの学部で複数回の総合試験を実施している場合は，それぞれを 1 回と数えたので，ここに挙げた学部数は，単に総合試験を実施している学部数ではなく選抜単位の数とも言える数字である。

次に，4 年制大学(188 学部)において実施している学部名称を整理してみると(表 2)，医学部，看護福祉系学部，理学系学部，教育系学部，工学系学部を中心に利用されていることが判る。

表 1 調査対象とした大学数，学部数，冊子数

	大学数	学部数	問題冊子数
国立大学	26	73	73
公立大学	18	65	65
私立大学	20	50	37
短期大学	2	9	8
合計	66	197	183

表 2 実施学部一覧(4 年制大学)

	個数	学部名	個数	学部名	個数	学部名
1	13	医学部	3	理工学部	1	国際学部
2	2	歯学部	1	理工学群	12	国際環境工学部
3	11	看護学部	9	工学部	1	国際関係学部
4	1	看護栄養学部	3	ソフトウェア情報学部	4	国際情報学部
5	2	看護福祉学部	3	工芸科学部	3	国際文化交流学部
6	3	保健看護学部	1	電気通信学部	2	生活科学部
7	2	保健福祉学部	1	園芸学部	1	生命科学部
8	1	保健医療学部	1	農学部	3	生命環境科学部
9	1	保健科学部	1	畜産学部	1	生命環境学部
10	3	健康福祉学部	4	環境科学部	1	総合政策学部
11	1	健康栄養学部	1	環境人間学部	1	体育学部
12	1	健康科学部	1	環境造園学部	3	地域学部
13	6	社会福祉学部	1	技能工芸学部	4	文学部
14	3	人間健康学部	13	教育学部	8	人文学部
15	3	人間生活学部	6	教育人間科学部	4	法学部
16	3	人間文化学部	1	教育文化学部	1	法経学部
17	1	人間環境学部	3	経営学部	3	法文学部
18	1	人間看護学部	1	経営情報学部	1	現代法学部
19	3	薬学部	6	経済学部	1	コミュニケーション学部
20	7	理学部	1	芸術学部	1	ビジネス情報学部
					3	全科類

3 内容分析

収集した全ての問題冊子(183 冊)について，これらに掲載されている試験問題を 1 題ずつ精査し，解答に必要な科目やスキル、思考方法等を特定した(本論文では以後，これらをまとめて「測定対象領域」と呼ぶことにする)。多くの試験問題は大問単位で 1 題を構成しているが，一部には大問の中をいくつかに小分けした中問レベルで他の学科等と共通した試験問題を構成している例も散見された。そこで，基本的には冊子に掲載されている大問単位に分析するものの，解答に必要な測定対象領域が中問ごとに異なっている場合には，その中問を 1 題ととらえて内容分析を行った。一方，試験問題の中には単問形式のものや，実験を伴うもの，留学生を対象とした日本語に関するもの等も含まれていたので，これらを除外して，最終的に 504 題を解析対象とした(表 3)。分析から除外した 20 冊を除いた残りの 163 冊(=183－20)について，1 冊の問題冊子に含まれる試験問題数の頻度と割合を表 4 に示すが，ほとんどが 1 題～4 題に集中しており，平均問題数は 3.4 題であった。

また，試験問題の内容分析の結果，最終的に 17 種類の測定対象領域が抽出され，全部

表 3 試験問題数

全問題数	578題
共通問題	53題
除外	21題
分析対象	504題

表 4 試験問題数の頻度分布

試験問題数	頻度	割合(%)
1	21	12.9
2	48	29.4
3	30	18.4
4	32	19.6
5	14	8.6
6	1	0.6
7	5	3.1
8	5	3.1
9	2	1.2
10	3	1.8
11	1	0.6
12	1	0.6
合計	163	100.0

で 868 回の測定対象領域が観測された。測定対象領域ごとの出現回数を表 5 に示す。なお，その際に数理的な思考力や言語的な表現力等を測る測定対象領域として，「論述を要するもの(論述)」，「論理的思考を要するもの(論理)」，「読解を要するもの(読解)」を挙げ，また，試験問題の素材として総合試験では「時事問題(時事)」を取り扱うことが広く行われているので，これらも測定対象領域として加えてある(表 5 下段)。

1 題中に含まれる測定対象領域数の頻度分布は表 6 の通りであり，平均値は 1.8 個であった。これを見ると，測定対象領域を 1 個だけ含む問題が全体の半分であり，2 個までで 8 割を占めることが判る。加えて，測定対象領域を 1 個しか含まない問題だけで冊子が構成されているものは全部で 32 冊あり，全体の約 2 割(=32/163)であった。

4 測定対象領域数による分類

そこで、一つの試験問題に含まれる測定対象領域の数に注目し，1 つしか出現しないもの

表 5 測定対象領域ごとの出現回数

	測定対象領域	出現回数	単一	複数
高校教科科目関連	国語	87	25	62
	社会科	3	2	1
	世界史	12	2	10
	日本史	8	1	7
	地理	5	2	3
	現代社会	2	1	1
	数学	70	45	25
	物理	59	45	14
	化学	68	43	25
	生物	46	18	28
	地学	9	4	5
	英語	100	48	52
	その他	6	1	5
	小計	475	237	238
思考力関連	論述	167	1	166
	論理	82	5	77
	読解	96	3	93
	時事	48	4	44
	小計	393	13	380
	合計	868	250	618

表 6 測定対象領域数の頻度分布

測定対象領域数	頻度	割合(%)
1	250	49.6
2	153	30.4
3	77	15.3
4	14	2.8
5	9	1.8
6	1	0.2
合計	504	100.0

を「単一測定対象領域問題(単一と表記)」，複数出現するものを「複数測定対象領域問題(複数と表記)」として分離したものを表 5 の右側に掲載した。これを見ると高校の教科科目に関連する単一測定対象領域問題は合計で 237 回(=237 題)あり，これは全体の 47%(=237/504)にあたり，試験問題のほぼ半分が単一科目で構成されていることが判る。つまり，試験としては「総合試験」という 1 冊の問題冊子にまとまっているものの，その中に含まれる試験問題は，単一科目の試験問題が複数配置されて構成されていることになり，特定の一科目に限定されない「教科・科

目混載型の総合試験」ということになる。

一方，教科・科目に固有の個別知識に依存しない数理的な思考力や言語的な表現力を測定することを意図したと考えられる思考力関連の測定対象領域については，単一測定対象領域問題は少なく(13 回=13 題)，ほとんどが複数測定対象領域問題となっていることが判る。これは思考力等を測定する際には，選抜単位の学部・学科に強い関連のある高校教科を題材にしたものや，試験問題に英語資料を提示したりして，複数の測定対象領域を明確には分離できないような形式で組み合わせて出題しているからであると思われる。このようなタイプの試験問題は「教科・科目融合型の総合試験」と呼べるものと言える。また，中学や高校の教育課程への依存度を減らし，内容や形式に自由度を持たせたタイプの試験問題は「カリキュラムフリー型の総合試験」ということになる。本研究で収集することができた試験問題は，藤井他(2002)および伊藤(2006b)によって定義された総合試験の全ての種類にわたっている。

5 数理的な思考力や言語的な表現力を問う問題

今回の内容分析では，総合試験に出現する数理的な思考力や言語的な表現力を問う問題を構成する測定対象領域として「論理」，「論述」，「読解」，「時事」を抽出した。これらの測定対象領域は深い意味合いを含んだ概念でもあるので，表面的な理解は総合試験を検討する際に誤解を誘引する恐れがあることに注意する必要がある。例えば，読解にはその対象として，文章だけでなく，図やグラフ，また表等も含まれるので，「読解」をより細かく検討する際には，これらの対象物を分離して再評価する必要があるであろう。

これら思考力に関連する 4 つの測定対象領域の組み合わせによる試験問題数を表 7 に示す。その際に，表 5 の上段に列挙した 13 の高校教科科目に関連する測定対象領域

表 7 思考力等を測定する際の組み合わせ

No.	論述	論理	読解	時事	高校教科科目 なし	高校教科科目 あり
1	論述				1	74
2		論理			5	22
3			読解		3	15
4				時事	4	9
5	論述	論理			0	10
6	論述		読解		15	13
7	論述			時事	15	8
8		論理	読解		17	1
9		論理		時事	2	0
10			読解	時事	0	1
11	論述	論理	読解		18	5
12	論述	論理		時事	0	1
13	論述		読解	時事	5	2
14		論理	読解	時事	0	1
15	論述	論理	読解	時事	0	0
				合計	85	162
					247	

を含めて各々の組み合わせを考えると非常に大きな数になり，しかし，スパースな表となってしまうので，13 の高校教科科目に関連する測定対象領域を一つにまとめて「高校教科科目の有無」としての組み合わせを求めた。これを見ると，思考力関連の 4 つの測定対象領域はどれか一つと高校教科科目との組み合わせで出題されることが多い(No.1～4)。また，4 つの測定対象領域の中では論述を含むものが多く(167 題)，表 7 に掲載された試験問題の 68% (=167/247)にも上る。逆に，4 つ全ての測定対象領域を含む問題は見あたらない(No.15)。

6 まとめと今後の課題

今回我々は大学入試で実施されている総合試験について，その試験内容に注目し内容分析を行った。その結果，約半分は単一の測定対象領域を用いる試験問題が混載された総合試験であることが判った。また，思考力を問う測定対象領域については，学部・学科に関連する測定対象領域に基づいて出題されていることも判った。これらのことは，今後総合試験の導入を検討する大学にとって，どのよ

うな作題をすれば良いかの一つの指針となるであろう。

教科にとらわれずに思考力等に重点を置いた試験に対するニーズは今後も高まっていくと考えられるので，総合試験に対する期待が衰えることはないように思われる。単一の測定対象領域が混載された総合試験は，従来からの作題体制を利用することで作成可能であろうが，思考力等を測定するための試験には，関連する測定対象領域をどのように組み合わせ，試験問題として作り上げていくか等の検討が必要であり，各大学における作題体制の育成が必要と考えられる。

今後は第 1 節で述べた入試の利用形態の観点(ア～エ)に焦点を当てて，総合試験の分類を試みる予定である。

参考文献

藤井光昭・柳井晴夫・荒井克弘 編著 (2002).『大学入試における総合試験の国際比較研究―我が国の入試改善にむけて―』多賀出版.

伊藤　圭 (2006a).「大学入試における総合試験および適性試験の動向」『大学入試研究ジャーナル』16, 149-153.

伊藤　圭 (2006b).「第 8 章 総合学力の測定」山森光陽・荘島宏二郎 編著 『学力―いま，そしてこれから』ミネルヴァ書房, 159-180.